
Stragglers Party

榊屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Stragglers Party

【Nコード】

N0210X

【作者名】

榊屋

【あらすじ】

この物語に『主人公』はいない。この物語に『仲間』はいない。この物語の『結末』は知らない。この物語を『描く』ものだけがそれぞれ存在している。『自分』が様々な謎にそれぞれの形で立ち向かう。これはそんな物語だ。 ネタバレの危険性があるため、序章が終わるまであらすじは意味の分からない感じになります。申し訳ございませんが、しばらくお待ちください。

1話 表面上の奇跡

僕はいつも通り学校へ向かう。3月22日。高校受験も3日前に結果発表され、本当の意味で終わり、卒業式も明日と迫っていた。学校は僕の家から自転車で約5分。

学校についた。

本日は卒業式のリハーサル（リハーサルって何だよ。僕らの卒業は1回だけだぞ！なのに先生達はどうして俺達にリハーサルなんてことをやらせるんだ。大体、僕らはそ【省略】）えーっと、何の話だったか……？

ああ、そう。

リハーサルのため、荷物はそんなに多くない。僕は荷物を机の上に置いて、ポケットの紙を確認した。

「よし……」

「何が『よし』なんだ？」

と、そこで友達が来た。僕は焦ってポケットに紙を入れる。

僕の幼馴染で、気さくな態度で誰とも仲良く出来るという才能を持つ、高校生活に不安なんてなさそうな、校則をしっかり守った髪形の、運動神経トップクラスで成績はトップ、名門高校を受験した生徒会長である、針葉陽一様だ。

「長い」

と、僕は理不尽に呟いた。全く。もっと平凡な人間であれよ！と、責任転嫁している僕を見て、針葉は不思議そうな顔をして、

「何か忙しそうだな」

と笑った。

「そっいゃ」

と、眼鏡の位置を戻して（優等生＝眼鏡という偏見は離れないのか。悲しきかな）、針葉は言った。

「^{かさね}襲、高校受験しなかったんだって？」

襲というのは僕の名前だ。女みたいで、あまり気に入っていない。
「まあな」

「どうしてだ？働かないといけない状況にでもなっちまったのか？
姉さんと2人暮らしたし……」

「姉さんって……」

「ああ、悪いな。昔からの癖だ……。で？どうなんだ？」

「別にそういうんじゃないんだけど……」

僕は1度撤回してから、言うべきか否かを考える。

……うーん。

「実は、高校に行くんだけど、この辺の地域じゃないんだ」

「ってことは、推薦で行くのか？」

「どうだろう。授業料免除、全寮制で教科書とかも無料らしい。金は全く掛からないから両親は了承しているし、姉さんも『さっさと行け』ってさ」

僕は笑ってそう言った。

「あの人らしいな」

針葉も笑う。

「まあ、これはどっちかというと招待って感じだな」

「そうだよな。お前は部活には入っていないし、勉強も言うほど出
来ないしな」

はつきり言ってくれる。

ま、否定できないわけなんですが。

「そうだ、針葉」

「何？」

「最近、世間で話題になっている暴力事件知っているだろ？」

「……ああ」

針葉は思い出したように言った。

暴力事件。

正確に言うならば、暴力致死事件。

「あれって何件目だっけ？」

「あゝ……確かね」

針葉は思い出すように額に指を当てた。

「昨日、17人目が死んだって今朝のニュースで言ってたよ」

……へえ。

17人……か。

「あれって、無差別殺傷事件の延長なんだろう？」

針葉がそう言った。

無差別殺傷事件。

数ヶ月前からこの街にのたまっている、謎の殺人鬼。

最初の事件は、老婦だった。1人の老婦が家の前でナイフで刺されていたそうだ。

その事件がニュースで取り上げられたのは1回のみ。その後は、一度もその事件は取り上げられなかった。

その後、会社員、主婦、ヤクザ、学生、ホームレスなど様々な人間が殺されたが、それぞれの事件は1度ずつしかニュースとして取り上げられては居ない。

しばらくして、その事件に噂が流れた。

『その人々を殺したのは、殺人鬼ではなく警察の上位の人で、事件を取り上げる事は出来ない』

という内容だった。

それは、なるほど納得できる理由ではある。

しかし

「途中から殴殺に転向したのは不思議だよな」

僕はそう言っ、針葉に同意した。

「どうしてだと思っ？」

僕は針葉に訊いた。

「分からないな……殺人鬼の気持ちは僕には」

「そうか？天才なら分かるんじゃないか？」

「別に天才じゃないよ」

苦笑いで、しかし強い口調で針葉は言った。

「そうか。何か悪かったな」

「いやいや」

そう言って針葉は笑って、事件の話を打ち切った。

まあ、彼も暇つぶしにはなっただろう。

どうせ明日には皆忘れる話だろうし。

チャイムが鳴ったので、教室に入って先生の話を聞いて（ている振りをして、体育館で卒業式のリハーサルを終わらせた後、針葉を家に誘った。

「いや、今日は止めておくよ。姉さんによろしく伝えてくれ」

「お前の姉さんじゃないだろ」

「そうだね。えつと……」

「魅了だ」
みりよう

「そう。姉さんによろしく」

「直ってない！！」

と、ぐだぐだな会話をしてから帰途に立った。自転車だけれど。走る。

思い切り漕いだ。

なんとなく、ストレスを発散するように。
気分はスカッとする。

そう、いつもの夜のように。

2話 裏表リミテッド

家に着く。

「ただいま」

返事は無い。

僕はリビング横の座敷に入り、祖父母の仏壇に手を合わせる。

「……」

僕はやはり、父さんの息子なのだろう。ねえ、じいちゃん、ばあちゃん。

誰も何も答えない。

僕はそのまましばらく座って手を合わせていたが、部屋の古い時計がボーンという音を立てて響く。

時計は3時を指していた。リビングのソファーに転がって、テレビを点けた。

「……ニュースはまだやってないか」

昔見たドラマの再放送をしていた。

だとすれば休憩しますかね。

「ただいま」

という声で目が覚めた。

ああ、寝てしまっていたのか、ということに気が付いた。

「もしかして寝てた？テレビの電気がもったいないよ」

姉が声を掛けつつ、そして冷蔵庫の前へ。

「寝てない」

「あんた、昨日の夜遅くも出かけてたでしょ？」

人の話を聞いてないな。寝てないって言ったのに……。

ていうか知ってたのか。

「殺人鬼だか暴力男だか分かんないのが、うるついてんだから気をつけるように」

そう言つて1?サイズのペットボトルのお茶を飲み始めた。

「姉さん……」

「何?」

「……本当に高校行つていいの?」

「いーよ。無償でしょ?他んどこよりマシ」

「寂しくない?」

「はあ?」

姉は間拔けな声で応対した。

「父さんと母さんは海外で活動中……祖父母も他界……姉さん1人になるでしょ?」

「アホか。私はもう18だ。もうすぐ成人だっつーの」

「でも彼氏もいな「殺すぞ」

「はい、すいませんでした。包丁を下ろしましょう」

姉の殺すときの殺意は、冗談じゃないくらい僕の心をえぐつてくる。父と母の影響だろうか。

危険な女だ。

何とかしないと。

「あんたは心配しなくていい」

姉はそれだけ言つと2階に上がっていった。

……。

時計を見る。

6時だった。つまり3時間余り寝ていたということか。

シヨックー。

で、テレビ(点けっぱなし)を見る。

『本日、15時頃、1人の男性の殴殺死体が発見されました』

15時……僕が寝始めた頃か。

『昨夜の未明頃、殺害されたと思われ、以前からの無差別殺傷事件と同一犯で、これで被害者は17人目と警察は発表しています……』

その後、キャスターやコメンテーターが事件について話し始めた。どうも人気のないところで殺されたらしく、偶然通りかかった高校生3人のグループが見つけて通報したそうだ。普段は通らない帰り道で、もし通らなかつたら気付かなかつただろう、ということらしい。

「さてと」

僕は呟いてから立ち上がり、2階に上がって仮眠を取る事にした。テレビを切るのも忘れずに。

階段を上がって自分の部屋の前に、そしてドアノブに手を掛けた。

「襲」

と、隣から声が上がった。

見ると姉が自分の部屋から顔だけを出してこちらを見ている。

「夕飯は？」

「寝ようとしていることがばれているようだ。」

「起きたら食べるから適当に作つといて」

「コンビニ弁当でいいか？」

「作つとけ！」

俺は姉を叱咤してから、自分の部屋に入った。

部屋はがらんとしていた。

荷物はほとんどまとめられ、寝るのはロフトなのでベッドもなく、あるのはもう使うことも無い学習机と椅子だけだった。

「……」

僕はポケットから紙を取り出して、机の上に置いてからロフトを上げる。そして布団に横になってから携帯電話を開く。

「……」

トップニュースでは、『現代のねずみ小僧』という見出しが『オークション 全て贋作』というものがあつた。もちろん、僕らの地域の『連続殺傷事件 17人目』というのもあつた。世の中、犯罪に満ちているなあ。

思いながら連続殺傷事件の記事を見る。

「今まではナイフで14人だったが、19日以降、殴殺に転校した……か」

呟くように読み上げる。

まあつまり殴殺死体は3人ということか。

ということは事件は殴殺死体は3日前から1つずつ作られているわけだ。別に無差別殺傷事件をそこまで取り上げる必要はなかったんじゃないだろうか。だって、どうせ数年後には何の問題もなかったように表舞台から消えるのだから。

さて、眠りに入ろう。

ピピピピ……。

と、アラーム設定しておいた携帯電話が、音ともに震え始めた。時間は12時。

……よし。

隣の部屋……姉の部屋の扉をノックする。

返事は無い。開ける。

居ない。

1階へ降りる。誰も居ないし、飯も無い。

計画通り、結局はコンビニに行ったのだろう。僕と一緒に今まで寝ていたであろうことは容易に想像できる。

「……やっぱりなあ」

僕は自分の部屋に戻って着替える。黒いパーカーとジーンズに身を包む。

「……姉さんは楽にしてあげないとな」

僕は自分の学習机の中からナイフを取り出した。

父の名前が柄に刻まれているナイフだ。元々はふたが存在していなかったそうで、父が蛇の皮のようなもので作ったナイフカバーに

入れている。取り出して刃を見る。研いであり、錆なんて1つも見当たらない。

準備完了、計画を遂行しよう。

「つと……」

部屋を出ようと足を向けてから、机の上に置いておいた紙をポケットに入れた。それから今度こそ部屋を出た。

家を出て、コンビニの方向を見る。

月が無い空で星の光を感じる。

「……行つてきます」

今行くよ。

楽にしてあげるからね。

姉さん。

3話 月無き夜、星に願いを

月の無い夜。

その田舎町で、人も車も見られない中で僕を含めた2つの影が走り続ける。

「……………」

僕は静かに前方の影を追いかける。対して、

「ハア…………ハア……………」

向こうは苦しそうに逃げ続ける。

僕は強くナイフを握り締める。そして息切れしないような全力で追いかける。そのくらいの呼吸法は知っている。僕は頭はいいのだ。体力もある。

「……………」

しかし、向こうもなかなかしぶとい。女にしては体力がある。

僕と同じ運動方法を取っていないのだから、凄まじい体力だ。

コンビニからの帰りだったろう。そのときに声を掛けた僕を見て——見ただけで、逃げ去っていった。まだナイフも出していなかったのに、だ。相手を殺人鬼だと気付いて逃げ出した神経のすばらしさ。未恐ろしい女だ。

いつ考えても凄いい姉さんだ。

殺したいほど。

「ハア…………ハア……………」

苦しそうに走っていく。

大丈夫、もうすぐ楽にしてあげるから……………！

僕はフードを深くかぶりなおした。

気付くと田舎町では、まだ都会部に値する地域に到着した。

人は居ない。そりゃあそうだ。僕のような殺人鬼が存在する街で夜中に外に出ようなどと考える者が居るはずも無い。のに、僕は連続で人を殺すことができる。

だって物好きな奴が居るんだから。だから僕は止まれないのさ。
路地裏に入ったその「物好きな奴」を見て、スパートを掛ける。
そしてそこで追いつくことに成功した。

「……かまーえた。」

「く……！」

「……………」

僕はその顔を殴った。女は飛ぶように奥へ吹き飛ぶ。

「……………」

僕は自分の拳を見直す。

当たった感触の割りに、向こうにダメージはほとんど無いようだ。
やはり凄い女だ。

ナイフを持ってきておいて良かったようだ。

僕はまだ倒れ伏している対象に向かってナイフを突き立て――。

「！？？」

腹部に強烈な痛みと衝撃が走った。

そのまま数メートル僕が転がって配水管のポールに背中をぶつけて止まった。

「……………」

そこには男がフードをかぶって立っていた。

男は黙って口になにかをスプレーする。恐らく……。

「サッサト逃ゲロ！」

変声期のような音を出して、女を見る。

女八男の姿を見て、頷いて逃げ出した。

「……………」

「悪イナ。アレヲ殺セルワケニハイカナインダヨ」

「……………」

「アレハ僕トハ違ッテ表立ッテ強イワケじゃない」

声に戻ってきたのだろうか、男はもう一度口にそのスプレーを入れる。

「……………」ヨシ。デ、アレハソノキニナレバ何デモ殺スト思ウケド……………」

僕ハソレヲヨシトハシナイ」

聞くのも無駄だ。

僕はそう判断して走り込んだ。そしてナイフを胸部に突き立てようと腕を伸ばす。

「諦メロ」

君はそう言つて、そのままナイフを右手の人差し指と中指の間で掴みとつた。

「！」

コイツはヤバイ。おかしい。

普通の運動神経や握力、そしてこんな状況に即応してナイフを掴むなんて……普通は出来ない。こいつは普通じゃない！

と思つた瞬間。空いていた左手が僕の腹部を殴つてきた。そしてそのままナイフを抜き去り、右手で頭を押さえつけられて、地面に仰向けに倒された。

後頭部に強い激痛が走つた。

「才前二ナイフヲ使ウヨウニ仕向ケタ。才前ハ気付イテイナイダロウナ。デ、才前ハ使い方を知らない。ナイフを使つたとしても——ナイフを使つたからこそ、お前が僕に勝てる事は無くなったということだ」

声に戻つた。

そして気付いた。

コイツ……！！

「お前の動機は理解しているつもりだぜ？ 殴殺死体が出来上がり始めたのは、合格発表の当日……つまり、3日前だ。その日以来、1つずつ死体が出来上がっている。……ここまで言えば、誰にでも分かると思うぜ？ なあ」

そう言つて僕を見下ろして、フードを外した。

そして僕の名前を呼ぶ。

「針葉」

「……襲エ！」
かさね

どういうことだ！うしてコイツが……！！
ともかく現状回復だ。

僕は馬乗りになっっている襲を蹴り飛ばした。そして距離をとった。

「……」

何から喋ればいいのか、と思っていると。

「まず」

と、向こうから話を始めた。

「動機は『受験失敗』だ。受験に落ちた腹いせに、他の成功した奴らを殺すことでストレス発散しようとしたんだろ？警察は無差別殺傷事件の続きだと思ってるらしいけど、そうじゃないことは僕がよく知ってる」

襲は笑う。

そして僕を指差した。

「犯人はお前だ」

まるで探偵のような振る舞いだ。

「探偵……？僕はそっちじゃないよ。どちらかといえばお前側だ」
僕側……？

「ともかく」

襲はそう言って話を区切った。

「お前は難関高校を受けて落ちた。いつも天才って言われ続けたプレッシャーとそれによるストレスが爆発した。それでその夜、1人目の男を殺した」

「……」

「何で怪しいと思ったか……それは主に勘だ。お前が犯人じゃないかと思っ、お前の発言の一つ一つを注意して耳を傾けていたのさ。そして今日……いや、もう昨日になっっているな。昨日の学校での話に矛盾を発見した」

襲はニヤリと笑った。

襲はそう言っただけ冷たい目を見せた。

「お前とは昔からの付き合いだからな。姉さんもいつもと違う雰囲気をお前から感じたんだろう。殺気を感じ取ったんだよ。姉さんは、そういうのに敏感だから」

だからこそ、何の説明もせずに闇に利用したんだけれど。

襲はそう続けて、僕を睨んで「あと」とさらに続けた。

「姉さんはお前の姉さんじゃない」

「悪いな。家族ぐるみの付き合いだったから、無意識だ」

僕はそう言っただけ静かに立ち上がった。

「初めて会話が成立したぜ」

「もう諦めたんだよ。警察でも何でも呼べ」

襲をそう言っただけ突き放す。現状にのっとれば、本来の意味で突き放されているのは僕だが。

しかしここまでバレているのなら、もはや無意味だろうという判断の発言だった。

のだが。

「はあ？」

襲の発言は僕の望むべきものではなかった。

「お前は捕まえない。姉さんを守るためには、殺人鬼のいる町として治安を守るべきなんだよ」

「……？」

確かに、今こうして殺人鬼がいる街並は、その殺人鬼を除けばとても平和だ。

だが。

それはつまり、僕を逃がすという事か？

「つーわけだ」

そう言っただけ襲は僕から奪ったナイフを僕の前に投げた。なるほど。どうやらそういうことらしい――。

「……」

僕は落ちていたナイフを取ると同時に後ろに下がった。

襲の手の中で何かが光ったのを見たからだ。

「ばれたか」

そう言って堂々と襲はナイフを光らせた。

「お、お前……」

「お前には死んでもらうぜ」

何言ってるんだコイツ……。しかし、襲の目は本気で、ナイフをしっかりと握っているのが分かる。

待て。

よく考えればおかしい。

何故、コイツは僕の前に現れたんだ？犯人だと分かっている、かつ、3人も殺しているような奴を相手取るなんて、いくら姉さんを守るためとは言え、無謀すぎる。

そして。

そして何故。

何故僕はコイツを恐れているんだ！？

「く……来るな！」

咄嗟にナイフを前に突き出して距離をとる。

「ど、どうして僕を殺すんだ！」

「動揺したな？弱味をみせたら殺人は負けなんだぜ」

「僕が生きていないと殺人鬼は居なくなる！今みたいに治安は守られないぞ！？姉が守れなくなるんだぞ！？」

僕の発言に襲は

「まだ分からないのか。だからバカなんだよ」

と笑った。『バカ』という言葉が僕の胸に思い切り突き刺さる。

その所為か、急に冷静さを取り戻した。

そして走馬灯。

僕と襲、そして姉の3人での楽しかった日々が思い出された。

『警察は無差別殺傷事件の続きだと思ってるらしいけど、そうじゃないことは僕がよく知ってる』

先ほどの襲の言葉が急に思い出された。

ああ、そうか。
そういうことか。

「殺人鬼はお前じゃない。お前の前に居た本物だ」
その声で僕は現実に戻された。
襲はそう言っ

僕に逃げる隙も与えなかった。

警察があまりテレビで報道ができなかったのは、僕が殺していたのは『犯罪者』だったから。

誰かが犯罪者を殺しているなんて、そんな噂を流すのは良いことではないから。

だから、誰も『僕の時』は捕まえることができなかった。
でも、針葉の時から一般人。

僕の時とは違って報道できるし、運が良ければ針葉の方を『真犯人』として捕まえられれば今までの事件もなかったことにできる。

まあ、そこまでの算段があつたかはわからないけど。

ともかくこれが警察が今まで14人に関われなかった理由——そして、僕が捕まっていない理由だ。

僕は針葉の首からナイフを抜いた。未だ、鮮血が流れている。噴水のように、とまではいかないが。

「ハハハ……」

僕は静かに笑う。

ピリリリ……と、何の設定もしていない携帯電話が悲しく鳴る。ポケットの中から携帯電話を取り出す。

『如月 魅了』

と書かれていた。

『もしもし？大丈夫なの？』

「……終わった。ちゃんと」

僕はそう言って静かに通話を切った。

続いて、

テロリロリンという雰囲気にとぐわなない陽気な音でメールを受信した。

「……」

ニュース速報だった。

「へえ……」

画面には「死宣告、8人目の殺人」という見出しだった。

死宣告。この地域ではない場所で最近、騒がれている殺人鬼だそうだ。

「会いたいもんだな。僕と同じ殺人鬼さんに」

僕はそのままポケットに携帯をしまい込んで、代わりに、入れておいた紙を抜き取る。

『如月襲殿 あなたの入学を心よりお待ちしております。 後世学園』

紙にはそう書かれてあった。

「行こうか」

誰に言うでもなく、星だけの孤独な空を見上げて僕は呟いた。
照らす月もなく暗がりの中を静かに歩いた。

3話 月無き夜、星に願いを（後書き）

序章―A murderous friend―編は終了です。

次は序章―A hired killer―編です。

1話 宣告

死宣告。

それが俺についた異名だった。

テレビのニュースで放映されている通りなのだが、説明をしておこう。

おもに警察が発表している情報から抜粋しつつ俺の言葉で説明しよう。

死宣告と呼ばれているのは当然理由がある。

俺は殺すと決めた相手に、『あなたを殺します』と宣戦布告するのだ。

宣告された相手は圧力に耐えられず逃げ惑う。

それを追い詰め、追い駆け殺す。そして最後に、殺した者の血液で『宣告通り』と死体の横に書いて完了だ。殺し方は『バラバラ殺人』だ。しかも腕や出欠の状態、断面などから、生きた状態でバラバラにされている。

当然こんな大きな事件を起こせば、誰かが何らかの目的で残虐な犯罪行為を行っている、と誰もが思うものだ。事実、そう思っている者が多い。

ということは一つの疑問が浮かんでくるはずだ。

『何故、死宣告は人を殺すのか』

つまるところ、目的——動機だ。

警察もそれを追っているようだが、いくら探しても動機が一つも出てこない——そうだ。

明らかに怪しい。何らかの理由づけくらいできるはずだ。どこか

しら共通点が見つかるはずだ。なのにそれすらも発表していない。さらに言えば、被害者の名前と顔を明かすことをマスコミ各社に禁じているようだ。しかもかなり強い圧力で。

警察も困っているのだ。

つまり、わからないのだ。

警察は犯人が何を考えているのかもわからない。

まあ俺の考えていることがわかるものなど、この世にいるはずもないのだが。

「さて」

前置きはこのくらいにしよう。

3月22日18:00現在。

俺は今、ある中学校の前にいた。

名前は……忘れたが、まあ大丈夫だろう。下調べも何もしていないが。

別の地域には17人も殺人を犯している殺人鬼がいるらしいが、この街にはそんな大罪を犯している者はいない。

俺を除いて、だ。

俺は堂々と入り口から入っていった。

警備員もいない学校だ。まあどの学校にでもあるわけではないし、仕方がないといえばそれで終わりだった。

俺が殺人を犯す理由。

それは人が絶望したときの表情を見るのが楽しいからだ。

人は未来が見えていないこの世界でも何らかの形で希望を持っている。その希望をすべて無——それどころかマイナスにまで持っていくことが成功すれば、俺はそこに快感を感じるのだ。

閑話休題。

どの学年のどのクラスを狙うかも決めてこなかった。
で、ふと体育館を見てみた。

見たところ卒業式が近いようで、体育館にはそれらしい準備がされていた。

ふむ……。

卒業して高校に入学しようという今、希望に満ち溢れているに違いないな。

だから、3年生を狙うことにしよう。

「見学の方ですか？」

学校の先生だろう青年が後ろから声をかけてきた。

「ええ、息子の入学先にどうかと思ひまして」

「ご自由に見ていってください。この学校は見学自由ですから」

そう言つて青年は俺の横を通つて、前へと進んでいった。

笑顔だった。が、なんだろう……。

違和感を感じさせるような笑顔だった。

「ああ……それで」

俺はつぶやく。

道理で無防備な学校だと思つた。

うちよろしても何ら問題ないということか。

と、すれば。

「あの、すみません」

俺はできるだけフレンドリーに、怪しまれないように声をかけた。

「3年生のクラスはどこでしょうか？」

2話 怠慢

ハア……ハア……ハア……。

日は落ちて、空はほとんど暗くなっている。

もうすでに、1時間近く走り続けている。

振り向く。

まだ影は俺を追い続けていた。

「何なんだよ……!!」

何故だ。

どうしてこうなった。

俺は。

俺はどこで間違えた!?

2階。

3年生の教室はその階にあるとその青年が言っていた。

「今日が卒業式でしたから……他の生徒はもう帰っていますが、3年生だけまだ残っています。担任の教師の話や生徒同士の別れの言葉とか……いろいろあるんですよ」

それだけ伝えて、1階にある『職員室』に入っていった。

終始、何か含むところがありそうな笑顔だった。

なるほど。卒業式が近いのではなく、今日が卒業式だからそのまま形が残っていたのか。

となると、3年生よりも2年生を狙う方が希望をつぶすのには良いのかもしれないけれど……どちらにせよ対象は3年生だ。だって3年しかないんだもん。

俺は自分のジャケットの内側のポケットを確認する。

銃が1挺とナイフが1本。

ただの中学生の人生くらい簡単に終わらせることができる。

俺は2階に向かおうと、階段の方に足を向けた。

「ん……？」

階段の横にエレベーターがあった。

別にエレベーターをしようと思った訳ではない。

エレベーターの前に車椅子に座った少女がいたからだ。

「こんにちわ」

少女は笑顔を浮かべて俺にあいさつした。

先ほどとは違って、自然な笑顔だった。

「……こんにちわ」

俺がそういうと、エレベーターに乗り込んで上に上がっていった。

「……」

あれもきつと3年生なのだろう。誰も車椅子を押してあげるような人間はいなかったことに多少違和感を感じたが、そういうこともあるのだろう。だからそれ以上気にも留めなかった。

エレベーターは2階で止まった。まあ、残っているのは3年生か先生なのだから当然といえば当然だった。

「……」

あの少女も殺すことになるのだろう。

別に希望を持った人間しか殺さないわけではないのだけれど、未来に希望を持っていそうにない奴までも殺したいのかと問われれば俺はこう答えよう。

殺したい。

「さてと」

俺はつぶやいてから階段を昇っていった。

2階に上がると、その階は少しざわついていた。俺が高校生だった頃も同様な状況だった気がするし、気持ちはわかる。が、お前ら

はそれ以上のざわつき——『動揺』を得ることになるんだぜ。
目の前の教室の後ろの扉に手をかけた。
思い切り開ける。

開けた瞬間、ざわめきは一度静けさに変わる。先生も生徒も俺を見て、まずは疑問を持つはずだ。

「誰……？」

誰かがつぶやいたような気がする。

それを合図にするように、俺は銃を取り出した。

世界は常に変化している。この空間だって例外じゃない。

ざわめきが静けさに変わり、次の瞬間には

「きゃああああああああ！！」

それは戦慄に変化していた。

一人の女子生徒のその叫び声で皆がはっとしたように動き始めた。男子も女子もそれぞれ悲鳴や狼狽のような声を上げて逃げ惑っている。それでも落ち着いたように対応して、全員が俺から離れて行くとする。

パン！

と。

銃声が響いた。もちろん俺の銃が火を噴いたのだ。黒板に弾丸が突き刺さっている。

「動くな」

俺は一言だけつぶやくように言った。それだけで空間はまたも静けさを取り戻し、動きも止まった。

支配感。

何と言っただろう……恐らく天下統一した豊臣秀吉や徳川家康はこういう気分を味わっていたんだろうな、と感じた。

「さてと……」

誰から殺そうか。

見たところ男女に差異はない。頭のいい奴か人望の厚いやつを殺

そうと思ってきたのだが、はてさてどうしたものか……。

そう考えたのだが。

「逃げなくていいんですか？」

斜め下でそういう声がした。

「……！」

何かと思えば、先ほどの車椅子の少女がいたのだった。

入ってきた瞬間に、恐らく目の前にいたのだらう。しかし気づくことができなかった。

いや——そこじゃない。

「何がしたい」

俺は質問した。

少女はまっすぐ俺を見つめる。

周りの生徒たちはその状況を見て、そわそわしたりびくびくしたりして、落ち着いていない。

それに対して、俺に発言してきた少女はこちらが驚くくらい落ち着いた対応だった。

「答える、何が言いたい」

「……」

少女は黙って自分の耳を2回ノックした。

耳を澄ませ、ということか。

その時小さく音が入ってくる。

……ウー……ウー……、と。

「け……警察……！？」

何で……。

いくらなんでも早すぎる。

いや——勘違いだ。これは別の場所へ向かっているだけで——

「あれは間違いなく、ここに向かっていますよ」

堂々と少女は怖がることもなく、俺に向かって言う。

「どうということだ」

弱味を見せるわけには行かない。俺が殺人鬼である以上、弱いところを見せることは敗北を意味することになるのだ。

「私が連絡しましたから」

そう言っただけ少女は特にそれを誇るでもなく、静かな目をして俺を見ていた。

その発言によって空気が少し緩んだのを感じた。

周りの生徒が少し安心していているということ――

「ふざけんな!!」

俺は銃を乱射する。

今度は叫び声が上がった。

「くっそが!」

ここで――こんなところで捕まるわけにはいかない!

俺は車椅子の少女の体を引っ張った。

少女の体躯は思ったよりも軽く、持ち上げることができた。

「く……」

少女は抵抗しようとするが、意味なく俺に引っ張られる。

「ルル!」

ご学友と見られる女生徒が、少女の名前を呼んだ。

残念ながらそれでも俺は少女を連れ去った。

「どうして警察に連絡できたんだ!」

俺は階段を走り降りながら尋ねた。

「不審者だったから連絡しただけですよ」

「は……!?!」

「この学校に勝手に入ってきたじゃないですか」

「な……」

どういうことだ!?

この学校は見学自由じゃ……。

「今日は警備員の人も既に出払ってしまっていますが、この学校は許可なく入っていい学校ではないんですよ」

「そんな……」

驚きつつも俺はそのまま走り続ける。

そこであの青年の顔が思い浮かんだ。あの妙な笑顔……。

だましやがったのか!!

だがそんなことをこの女に行っても仕方がない。

「さらに言えば、私は人の殺気を感じることができんですよ」
そう言って少女は。

先ほどとは違い、ニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

瞬間だった。

寒気とともに彼女の足元に目が行った。

おかしいとは思ったのだ。

足が使えない女を引っ張ると、それはただのお荷物のようになる
そくだ。だから人質として、足の不自由な奴は使い勝手が悪い。

それを思い出したがもう遅かった。

その少女が二本足で立っていたことに気付いたのも、遅かった。

3話 殺人

気づいてすぐに俺は少女の体軀を投げ捨てた。

寒気はすでに通り過ぎていて、恐怖に変わっていた。

「お前、何なんだよ！」

「じゃあ貴方はいったい何でしょう？」

クス、と。

軽い笑い。空気が抜けるようなその笑いは、嘲笑や苦笑に近いもので、しかしそれ以上に恐怖を感じさせた。

もう後は考えるまでもなかった。

俺はそいつに背を向けて走り出した。

1時間以上走ったのだ。

それでも影はゆらりゆらり、のらりくらりと、迫ってきていた。

俺の全力疾走にまるで、歩くようなペースで影は追ってくるのだ。

「畜生！畜生！！畜生！！！」

くっそが。

どうなっている。

これは一体どういうことなんだ！！

「いつまでも鬼ごっこを続けんですか？それともかくれんぼにでもしましょうか？」

女はそう言っただけ俺を追い駆け続ける。

よくよくみると、一步一步で驚くくらい進んでいるようだ。

『縮地』。

それが突然頭によぎった。

いや、そんなわけがない。あんなの現実にできる奴なんているはずがない。

俺は走り続けた。

どんな道筋を何分走り続けていたのかも覚えていない。
外はかなり暗くなっており、月明かりも見られなかった。

そこがどこなのかもしれない。理解はできていなかった。工場の跡地ということだけは分かった。

「やはり、かくれんぼの方が正解だったか……」

あの速さを相手取るには、俺の体力にも限界があった。だからうまく路地裏やら曲がり角やらを利用して上手く撒いた――

「かくれんぼでも私には勝てませんよ」

――つもりだった。

「……!？」

「残念でしたね。私からは逃げられません」

私は鬼ですから。

そう言って少女は笑った。

「ところで」

少女は更に続ける。

「貴方はいったい何者なのかしら？」

「俺は……」

俺は。

俺は銃を取り出した。

「俺は死宣告だ!」

そして弾丸を放つ。

ほぼ距離は1メートル未満。

ならば、負けるはずがない。

そう踏んでの行動だったのだが――

「!？」

少女は無造作に腕を振っていた。
いや、俺からすればそれは無造作だったのだが、彼女の眼は明らかに何かに狙いを澄ましていた。
そしてその狙いが的中したのだろう。

空中で弾丸が真つ二つに切られ、さらに4等分されて落下した。

「は……!？」

彼女が切った。

そうとしか考えられないが、そうとは考えにくい。

「な、なにをしたんだ!？」

「今……死宣告って言いましたか？」

少女は少し怪訝そうに俺を見つめた。

「ああ。この辺一帯の殺人鬼はこの俺——」

「どうして殺しているの？」

少女はそう言っただけをにらむ。

「は……!？」

「貴方はどうして、殺人を犯し続けるんですか？」

「……」

動機。

警察官も知らない、俺の殺人の動機。

その意味をこいつは興味本位で知りたいということか。
なら、教えてやろう。

「快樂だ」

「……」

「俺は希望を持っている人間を殺すことに喜びを感じている。俺にとって殺人を犯す理由はそれだけで充分——」
ぼとり。

「ん——」

何かが落ちた音に気付いて、俺は左側に視線を向けた。
長い棒のようなものがあり、途中が屈折している。そしてその上部には5つの突起が見えた。

え。

いや、この形は。

腕だ。

「う、うああああああ！！」

俺は自分の左腕がなくなっていることに気付いた。それからすさまじい痛みが体を襲った。

「適切なことを言わないでください」

強い嫌悪の視線を俺に向けていた。

「よく考えればわかるでしょう？警察が動機を見つけれてないわけがないじゃないですか」

「ああああああああああ！？」

痛みに叫び続けている。

それでも、こいつの発言に耳を傾けていた。

どういうことだ？つまり、警察は動機を見つけていたということか？

「どうして死宣告をされた人は宣告された時点で——脅迫された時点で警察に連絡しなかったのでしょうか？」

「あああああ！！」

「逆転の発想です。つまり、なぜ脅迫された時点で連絡しなかったのかを考えるのではなく、連絡できない人間とはどんな奴なのか、ということですよ」

少女は俺を見下ろして、淡々と続ける。

俺は脳をかき回して、思考を何度も何度も繰り返す。

つまり、警察と関わることを拒否するような人間——警察に調べ

られては困る人間――。

「ま、さ、か……」

俺は小さな声でつぶやいた。

「そう。宣告された人間――殺された人間は全員犯罪者なんですよ」
そうか。

そういうことだったのか。

犯罪者は警察に連絡することはできない。だから、警察はいつも死宣告に後れを取っていたのか。

「警察側も、『何者かが犯罪者を殺している』なんていう噂を流すわけにはいかないから、被害者の名前すらも出すわけにはいかなかったんですよ」

どっかの新世界の神がやろうとしたようなことが起きるのは現実世界では避けたいことでしょうから。

そう言って少女は自分の言ったことを嘲るように笑った。

「お前……何なんだよ」

俺は（本当の意味で）決死の覚悟で、少女に問いかける。

「まだわかりませんか？」

「……いや」

正直なところ気づいていた。

死宣告というもののへの異常な依存。というよりは、まるで自分のことのようにすべてを理解している。

つまり――

「本物の……死宣告か」

俺は少女を見た。

「ええ」

少女はもう一度にやりと笑った。

その笑みにあつた恐怖は、最終的には、畏怖にまで変わっていた。だが、不思議と今度はそこまで逃げようとは思わなかった。
なぜなら

「俺はアンタの生き方に憧れた」

死体の横に、宣告通りと書いてから私は立ち上がった。

「貴方もこんなことさえ——犯罪行為さえ行わなければ、我々の組織に殺されることはなかったんですよ」

我々の組織。

簡単に言えば、犯罪者撲滅組織だ。

私は諸事情によりそこに所属することとなり、諸事情により犯罪者を殺している。

詳しい話は私はしたくないので、省略する。

まあ誰が聞いている訳でもないのだけれど。

「それにしても」

ここで私は死んだことにした方が本当は都合がよかったのだけだ……。

「どう伝えたものかしら」

私がそう呟くと

「！」

カラスが工場跡地に入り込んできた。

「何かしら？」

私はそのカラスに話しかけた。

『本部の方に届いた通知だ。マリア様が謹んでお受けしろと言っている』

とカラスは言って、口に咥えていた封筒を落とした。

私はそれを拾い上げた。

『では私はこれで。こいつは、破壊しておいてくれ』

カラスはそう言って、さらに口の中から通信機を吐き出してから飛び去って行った。

私はまず、その通信機を踏みつぶす。

それから封筒を開いた。

「！」

ウー……ウー……

と、サイレンが聞こえた。

ポケットに無理やり封筒を突っ込んで、走り出した。
するとすぐに、街をビルからビルに飛び回る影を見つけた。

「……まさか、『現代のねずみ小僧』の仕業かしら？」

あんな動きが出来る者はほとんどいない。ともすれば。

「殺しましょうか。私の手で」

つぶやいてから私もビルの上へと跳躍する。

そして、その影を追い駆けていく。

「は、はあ！？」

影はそう言っただけ。

「お前、縮地じゃねーかそれ！！」

「！？」

初めてだ。こんなに早く私の移動に気付いたのは。

これは……只者じゃない。

「くっそが！！」

そう叫んで影は消えた。

——消えた！？

私は瞬間的に殺気を探そうとする——が、相手は殺人犯ではない。
殺気では見つけられない。

「逃がした……」

まあ仕方がないといえば、仕方がない。

が、まあまあショックではあった。

「……」

私は静かに、ポケットの紙に手を伸ばした。

『十六夜 縷々 殿 あなたの入学を心よりお待ちしております。
後世学園』

……後世学園。

「どついうことか……マリア様に聞いてみなければならないわね」

私は呟いて空を見た。

月はなかった。

3話 殺人（後書き）

序章 | A h i e r d k i l l e r |

はこれで終了です。

バトル要素も取り入れられる可能性を残しておきました。

次は

序章 | A p h a n t o m t h e i f |
です。

1話 栄華之夢（前書き）

序章―A phantom thief―

1話 栄華之夢

3月22日だった。

「まーや！」

そう言つて俺は彼を呼ぶ。彼は眠そうに顔を上げた。

「……何？」

「卒業式の準備。やるぜ！」

俺がそういうと、

「俺がやなくなつていーじゃんよー」

彼はそう言つて、眠そうに顔を上げた。

「お前が居てくれたら、10人楽できるんだよ！ほら、来いよ！」

「それお前が楽しただけじゃ——」

「何のことだか」

俺はにやりと笑つた。

彼は四阿あずまや 朔馬さくま——通称「まーや」

彼は異常な少年だった。

体育館に数人で固まっていた集団に混ざる

「よう！遅かつたな！」

「ああ、まーやが渋つてた」

「俺寝てただけど……」

まーやはそう言つて、軽く笑う。

それでもまーやはやる気を出したのか、

「っしや！任せろ」

と言つて笑つた。

そして、女子が持っていた装飾品を手につつて、飛び上がる。

彼の異常な点。それは、運動神経。

バスケットゴールのリングの上に立ち、さらにそこを踏み台に2

階に上がる。

「ここから向こうにつなげばいいんだな？」

と、まーやは言って今度は壁をける。

そのまま次の足を壁に、さらにその次の足をと。

彼は壁を走り出した。

常人ではできない行動。常人ではもちえない筋肉。

彼は備えられるべき力が限界値まで底上げされているのだ。

向こう岸に到着して、飾り付けを済ませる。

「他にやれることあるか？」

「いや、これだけだったんだよ。ありがとう、まーや」

「……これって本当に俺がする必要あったのか？」

「楽できて助かったよ」

「まあいつか」

まーやは淡泊にそう言って、二階から飛び降りた。

「まーや。カラオケ行くか？」

「ゆく！」

まーやは歌が上手い。

そして上手いうえに、特技がある。

まーやと俺と、もう一人友達と一緒にカラオケ店に向かった。

「……………」

彼には声色がいくつもあるのだ。

女性アーティストの曲も男性アーティストの曲も、機械音までできる。そしてデスメタルまで完備。

のどの筋肉がどーのこーのと彼は言っていた。

「昔から、声真似みたいなのが好きだったからな」

まーやは笑う。

「まーやは何でもできるよなー、スポーツでもなんでも」と、友人の一人が言った。

「おうよ。何でもしたいんだよ。俺は、な」

「でも、人見知りだよなー」

俺はそう言った。

「う……」

「ていうか、恥ずかしがり屋だろ？女子とも話せないじゃん」
友達も同意する。

「覚えてるか？一年の時の自己紹介！」

「あー、覚えてるよ！四阿 さきゅまだろ？」

「そうそう！皆の前で上がったちゃって、噛みやがってさ！」

「ああ、そう言えば今年の国体で、助っ人でバスケット部の助っ人してさ！」

「あー、あのダンクシュート決めたり、最後にブザービートでエンドラインからゴールまで投げ飛ばしたり！」

「で優勝したのに、最後にみんなに胴上げされそうになって全力疾走で逃げたりさー」

「あー、もうっせ！」

まーやは叫んだ。

「何なんだよ！もう帰るぜ！」

「やめるよ。マイクを通して叫ばないでくれよ……」

俺はそう言って、耳を抑える。

「でも、お前って部活動しなかったな。何でなんだ？」

「いや、目立つのは好きじゃないんだよなー」

「でもスポーツ推薦とかもできたかもしれないぜ？」

「いいんだよ。俺は、スポーツなんか二の次で」

と、まーやは笑った。

「へー、じゃあ何かあるのか？やりたいことでも」
「あるよ」

まーやは呟いた。

「俺、夢あるんだよ」

俺には聞き取れなかった。

2話 裏の裏に行く

3月22日の夜。

俺は裏路地に居た。

「今回は会社内にある、1枚の絵画。それを手に入れることさえできればいい」

ホームレスの爺さんこと、『やっさん』は、座ったままノートパソコンをいじりつつ俺に吐き捨てた。

「……いつも思っけどそのスタイルは似合わないよな」

「そうか？ 偏見は捨てたほうがいいな」

見た目はただのご老体のホームレス。

しかしそれは周りからのカモフラージュ。実は裏オークションへの仕入れ人だ。

裏オークション。

それは基本的に『盗品』の美術品を扱うオークションだ。

どうしてもその美術品が欲しい者や、あるいはただのオークションと同じノリで参加する者などさまざまである。

その仕入れ人である、ということはずなわち彼は『盗品を扱う男』だ。

そう。

泥棒である。

「ある会社っていうのは？」

「王城グループの提携会社だ」

「王城グループ？ っていうと、都会のあれか？」

「あれだ。その提携会社だよ」

「となると、ほかに価値のあるものもありそうだな？」

俺はニヤリと笑って、やっさんを見た。

「ああ。お前の欲しがっていた宝石もある」

「『カオスビリオン』か！？それとも『ティアーナイト』……！？」
「残念だがその2つとも違う。『バイオレット』だ」

「バイオレット……」

バイオレット。

それは日本で作られた『堇色^{すみれいろ}』の宝石。

宝石そのものはそこのダイヤと遜色^{そんしょく}ないが、その装飾の造形美が一目置かれている作品だ。その素晴らしさから、『バイオレット』という色そのものを名乗ることのできる数少ないこの世界の宝石の一つとなっている。

「……マジかよ」

「思ったよりも上で驚いたか」

「ああ。俺の夢だ」

「言うと思っただぜ、坊主」

「坊主じゃない。俺も立派な怪盗だ」

「まだ認めてはいないぞ、師匠としては」

「いい加減認めさせてやるぜ」

俺はそう言っただけで坊主を睨む。

坊主さんはそんなこと諸共しない様子でパソコンをいじると、

「メールで地図を送っておいた。指示もメールでしてある。ちゃんと記憶して任務を遂行しろ」

「了解だ。任せとけ」

「あと、服はこれな」

そう言っただけで坊主さんは1つの紙袋を渡す。

「スーツ……」

「ああ。あと、スーツケースには道具一式入れている。使い方は説明するまでもないよな。あと、王城グループの人間として入れるように連絡はすでに済ませてあるから安心しろ」

「準備がいいな」

「俺の代わりにやってもらってるんだからな。それくらいは当然だ」

そう言ってやつさんはさっさと行け、と言わんばかりに手を振った。

俺は苦笑しながら路地を出た。

最寄りの駅のトイレで着替えを済ませた。

「……ふむ」

鏡で自分の姿を確認する。

サラリーマンの様なきつちりしたスーツに、いつもはつけない伊達眼鏡。

その容姿や身長や体格からもう大人であるようにも見えるが、少し若すぎやしないか？

そんなことを思いながら、あまり長々と鏡の前に立っているわけにもいかないので、駅のトイレから出た。

会社名は『未来財閥』。ビルはこの地方では大きい方で、20階建のビルだ。

割と新しい企業で、専門としているのは警備関係らしい。骨が折れそうだが、その分戦いがいいのある会社だ。相手に不足はない。

「行くか」

スーツケースを片手に俺はロビーに入った。

受付の前に行き、

「すみません」

と声をかける。できるだけ格好よく、クールに。

「はい」

「王城グループの四阿です」

「あ、はい。今社長の方に連絡します」

受付の女性はそう言って電話に手を伸ばした。

しばらくして一人の男がやってきた。

「社長の菊川と申します」

と、名刺を見せてきた。

緊急事態。

こちらにも名刺を出さなくてはならないが、果たしてどこにあるのか。

取り敢えず、内ポケット。

あった。

緊急事態その2。

マナーを知らない。

仕方がない。

まず俺は菊川社長の名刺を受け取る。次に、俺は名刺を取り出すふりをして、一枚を床に落とした。

「ああ、申し訳ありません」

少し焦る様子を見せる。

「いえ、構いませんよ」

予想通り、菊川社長は自らの手でその名刺を拾い上げて受け取った。

作戦通り。

エレベーターに乗り込み、最上階にある社長室に向かう。

「……」

俺は携帯電話で仕事内容と手順を再確認。

あと、5分……。

エレベーターが最上階で止まり、応接室に案内される。

その応接室の奥には社長室がある。

そして俺の目的の美術品は目の前にある。

応接室にかかっている、金色の装飾された額縁に飾られた一枚の
絵画。

「見事な絵ですね」

「おお、わかりますか!？」

「ええ、本当に」

繊細かつ大胆に描かれた絵だ。見事な色彩で描かれているその西洋の街並みは素晴らしいの一言に尽きる。

これは欲しがるのも分かる美術作品だ……。が、少し違和感。

素晴らしいの一言を言わせる作品を作ったような……そんな感じ。それは、そう。

心が込もった絵を、心を込めて、心が込まらないように描いたような絵。

うん、自分で言ってる意味が分からない。

そして俺の欲しがる『バイオレット』はどこだ？

P u l l …… P u l l ……。

と、奥の社長室で電話の鳴る音がした。

「おっと、失礼」

菊川社長はそう言って奥の部屋へと消えていった。

「作戦決行だな……」

この部屋にあるバイオレットも探し出さなくては。

タイムリミットは約5分だな。

3話 危急存亡

スーツケース開く。

中には様々な工具があるが、今回はあくまで絵の回収。額縁も含めて回収しなくてはならない。

ともすれば、『無理やり』回収するしかない。

スーツケースの中からビニール製の袋を取り出す。

そこに掛けられている絵を入れる。

それから、スーツの内側の背中側にある特別性のポケットにその袋ごと入れた。

この作業には全く時間はかからない。

これからやるべきことは、俺の目的物探したが……。

この会社は別に宝石に関しては関係のない会社だ。

つまり、倉庫やどこかの一室にはないはず。

ならば一番高いくらいにいるこの男……菊川社長の部屋にある可能性が高い。

恐らく隠していないだろう。この絵を自慢するような社長だ。大事に保管する可能性はかなり低い。

……よし。ならば。

俺は応接室の扉を開けて、外側にスーツケースの中の小型スピーカーを付ける。

それから俺は自分の襟元にピンマイクを付けた。

しばらくして菊川社長が帰ってきた。

「申し訳ありませんね。よくわからないご年配の方から苦情があり

ました」

間違いなくやつさんだな。ナイス。

俺は襟を直すふりをする。

「では話を――」

コンコン。

と、扉をノックするような音がした。

「何だね？」

『すみません。急なお客様が……』

女性の声がした。

「全く……」

と菊川社長が言つて、

「申し訳ありません」

と一礼してから応接室の扉に向かった。

俺はその隙に社長室に入る。予想通り、デスクの上に堂々と置かれてあった。

「これが……」

大きさは手のひらのサイズ。しかしそれは妖しく輝いている。

「すげえ……流石バイオレッド……」

「待て!!」

菊川社長がようやくやってきた。

「それから手を離せ」

「お客様はもうよろしいのですか？」

「……」

「ああ。いなかったでしょうね。誰も。だって、」

と俺はのどに軽く触れる。

『私が声を出したんですから』

女の声は俺の口内から発される。

「!？」

「じゃ、また今度」

俺は自分のポケットから工具を出す。
小さなハンマーである。

「無駄だ。すべて強化ガラスの窓だ」

菊川社長は言う。

「いやいや、強化ガラスくらい壊せるって」

俺はそう言っ

て。スーツ内のすべてのポケットから小型のハンマーを出す。計8個。すべてを指の間に挟む。

「俺、握力片方ずつ69だから」

そう言っ

て、そのまま回転して遠心力をかけ、一点集中で窓ガラスをたた

く。パリン!と。

少しながら小さな穴が出来た。

「穴が開けばこっちのもんさ」

俺はそう言っ

てもう一度叩いた。完全に破れた。

「な!？」

「お疲れ様です」

俺は言っ

た。この階から飛び降りて大丈夫だろうか？

答えは簡単、大丈夫じゃない。

俺は窓から飛び出した。

「は……!？」

最後の菊川社長の声は驚きの声だった。

そう。俺は窓の外から——つまるところ、20階の窓から飛び降りたのだ。

が、正確にはそうではない。
近くにある、18階建てくらいのマンションの屋上に飛び移った
に過ぎない。

まあそれでも10メートルくらいは離れていたから、俺はすごい
のかもしれないが実はそんなに驚くべきことでもない。

パルクール。

どんな物かというと、スポーツの一種である。
近所の環境でできるスポーツ。

街を走り回るスポーツである。
教えてくれたのはやつさん。

やつさんは俺に怪盗のためのすべてのことを教えてくれた。

ウー……ウー……と、サイレンが聞こえてきた。

最近の警察は早いが、俺を捕まえるには100年早い。

と。

視野の隙間に何かが飛んでくるのを確認した。

それは……その人の影が静かに歩いてくるような

「は……はあ!？」

急のその影が歩いていながら迫ってきた。

これは、そう。

やつさんが言ってた――

「お前、縮地じゃねーかそれ!！」

俺は叫んだ。暗闇に溶け込んでいるため向こうの表情は読めない。
っていうか、どうやってビルの上を走ってきたんだ!？

いや、それよりも、さつさと行動に移そう。

「くっそが！」

俺は叫んで、相手に見えないうちに死角を狙って飛び込んだ。恐らく相手には俺が消えたように見えただけ。

そしてそのままビルを落下する。

多分、5階建てくらいだろう。だったら17メートル程度。

心配ない。大丈夫だ。

俺はそのまま落下した。

ボスン！

と。

俺はごみ箱の上に落下した。

「……助かった……」

あの人影……誰だかわからないけど、間違いなく俺を殺そうとしていた。

「……まあいいや。帰ろう」

取り敢えずはやつさんのところへ。

3話 危急存亡（後書き）

今回は4話もあります。

4話 嘔吐きは泥棒の始まり

「偽物オ!？」

俺は思わず路地で叫んだ。

「ああ。間違いなくこの絵は偽物だ」

やっさんは虫眼鏡で細かいところを見ながら言った。

「……そんな、バカな!」

そんな素振り一切見せなかった。本気で絵にほれ込んでいて……。

「ああ、お前は悪くない。あの絵を見た人間全員が騙されていたんだからな」

「……あ!」

俺はある事実を思い出した。

それは、俺が絵を見たときに感じたこと。

心が込もった絵を、心を込めて、心が込まらないように描いたよ
うな絵。

「……なるほど」

とやっさんは呟いてにやりと笑った。

「帰ってきたんだな、『タイガ』が」

「……たいが?」

俺は訊いた。

「……お前は今日のところは帰れ」

「あー……ちょっとそれは無理かな?」

「なんでだ」

「俺は今日でこの街を出る」

「……!？」

「だから言っただろ?認めさせてやるって」

「……そうか」

『タイガ』という名前の由来は中学高校地理に登場する冷帯の針葉樹の森林のことらしい。

その仕事はいわば『贋作師』だ。ただし、ただの贋作師ではない。俺やっさんのようなそういう物を扱う者でしか——さらに言えばその中でも、レベルの高いものでしか分らないそうさ。

例えばやっさんの場合は経験から『なんとなく違う気がする』という理由で分析を行い、おかしな点を本物と比べる。そうして今回のように気づくことができた。

俺の場合は完全なる直感だった。同じ言葉でも違う意味で『なんとなく違う』という気がしたのだ。

これは『芸術』だけど価値はない、と。

自分でも何が何だか分からなかったが、贋作だとわかって納得がいった。

贋作という芸術であり——しかし所詮はそれは贋作。価値などないのだと。

「……ふむ」

俺はバイオレットを野球ボールのように投げては取るを繰り返す。それでは飽き足らず、足の下をくぐらせて上にあげたり、背中の後ろを通してキャッチしたりと、アクロバットの動きを始めてしまった。

気づけば街の中でやってしまっていたためか、周りの目が集まっていた。そりゃそうさ。こんなアクロバットな動きをしかも一般人では手も出せないような宝石でやってしまっているのだ。

「……」

何より恥ずかしかった。俺は逃げ出すように走り出した。

「坊ちやま。お帰りなさいませ」

家に帰ると門前に居た所謂、『お目付け役』が俺に声をかける。

「遅かったですね」

「まあねー」

「明日この家をお出になるといふことでご両親は少しご心配なさっています」

「そう言っても彼らは今日も会社だろ？知ってんのさ、その辺のことは」

「ちなみに明日からも私は貴方に付きまといますが」

「ご存知ですよー。これからよろしくね」

「了解しました」

ちなみにこの人は俺のお目付け役をすることをあまり良しとはしていない。

なぜならこの人はあくまで両親の会社の人間であって、四阿家の雇った人間ではないからだ。

あずまや
東屋。

イントネーションは駄菓子屋のそれと一緒にだ（ちなみに俺の名字の方の四阿は吉野家のイントネーションだ）。

最初は小さな和菓子店だった。父親の祖父が始めた。

それが大きくなり老舗の和菓子店となったのが、俺の祖父、つまり父親の父親、つまりつまり東屋二代目の時だった。

そして今、父親が色々な方法で人脈や商業方法を広げた結果、大企業へと成長を遂げ、幅広く活動している。

そんな父親とそしてそのサポートをしている母親を俺は企業家として尊敬し、人の親として軽蔑している。だから、俺は俺の力で金を稼ぐ。そしてその方法が——怪盗。

俺は自室に入った。

「何時見ても完璧な部屋だ」

俺は俺の部屋を見て真っ先に呟いた。

やつさんに鑑定してもらった本物でなおかつ価値のある宝石や絵画を広げた俺の部屋。

この部屋を見てお目付け役は何も言わない。どうでもいいようだった。

「これも持つていかないといけないけど、寮の部屋は広いのか……？そもそも1人部屋なのだろうか」

何せ、紙には何も書いていないのだった。後世学園はどうも固い固い機密組織のように情報が隠されているようだ。

まあ明日向こうから迎えに来るから大丈夫だろう。その時に事情は聴けばいい。

ちなみにこれらを持っていけないなら、入学の話は蹴る。

『四阿朔馬殿 あなたの入学を心よりお待ちしております。後世学園』

空を見ている。月明かりもない上に街中がネオンに照らされているため、星もよく見えない。

最悪の前夜だった。

4話 嘔吐きは泥棒の始まり（後書き）

序章―A phantom thief― 終了です。

次は 序章 - A workman who fake a work of art - です。

1話 青き春（前書き）

1話。

1話 青き春

3月21日。

卒業式。

他の学校では明日や明後日ということだそうだが、この学校は周
囲より早く終わったということだ。

式は普通に始まり、普通に終わった。

皆、両親や祖父母などが見に来ていたようだったが、私にはその
どれもいないので、見に来てくれたのは唯一の家族である叔父だけ
だった。

父と母、そして祖父は5年前、私が小学校にも行かず、家にこも
っていた時に殺された。祖母はその後、何を思ったか、首つり自殺
で死んだ。そして、私はどこに身を寄せるのかという話になり、一
番仲良くしてくれていた叔父が引き取ってくれることになった。

叔父と言っても父の弟で、年齢はかなり離れている。確か、今3
0歳くらいである。つまり、本来は仕事があるのにも拘らず、彼は
卒業式に足を運んでくれたのだった。

「来年からそれぞれ別の高校で、或いは同じ高校で、それでも別々
の道を歩くことになります。皆さん、体に気を付けて、来年から高
校生活を楽しんでください」

先生はそう言ってホームルームを終了した。

皆はお互いで、別れても仲良くしようね、とか、来年もよろしく
ね、とかいう会話をしている。私も友達とは別の学校に行くという
ことで、涙無しには居られなかった。

その後、私は同級生の1人と一緒に美術室に向かった。

「部長として最後に挨拶しないと！」

と張り切っている「元」部長こと、忍に

「次の部長も決めないとねえ」

とのんびりした返答をしていた。

部、というのは美術部のことだ。私たちは美術部で活動していたのだった。

美術室に入ると、卒業する私たちを快く迎え入れ、祝ってくれた。

「元」部長も最後に新しい部長を任命し、仕事を終えた。

私はその間に、自分の作品と賞状を持って帰るために鞆に詰め込む作業をしていた。

「お、天才絵描きじゃん」

と、そう言っただけ現れたのは、赤い眼鏡で金髪の髪を上に上げて後ろで結んでいる。

「早乙女先生」

「卒業おめつとさーん」

そう言っただけ顧問の先生である早乙女先生は段ボールの箱を教壇の上に置いた。

私の絵を心から褒めてくれ、更にアドバイスなどしてくれる恩師だった。

「お前の方が部長より賞とかとってんのに副部長なんだよなあ」

と忍を見て言った。

「それはお口ミッフィーですよ」

と忍も苦笑いで答えた。

「賞が全てじゃないから……私には皆をまとめるような力はないしそれに。」

私は続ける。

「縛られるのは好きじゃないから」

「そうか。ま、来年もどつかの賞にお前の絵が入ると思ってるよ」

早乙女先生はそう言っただけニヤリと笑った。

「帰るよー、ゆとり」

忍が私に言った。
そうして私たちは最後の学校を後にした。

忍の家は街を抜けた所にあるのでそこで別れた。

私の家は山中の獣道ともいえない道を抜けたところにある。

それは大工だった父と祖父が作った木でできた、所謂、「ログハウス」というような物だった。

入ると、いくつかの豆電球が仄かに照らす程度で少し温かみを与えてくれる暖色の光だった。

「ああ、お帰り、ゆとり」

と叔父が私に優しく声をかけた。毎日、私が何時に帰ってきてモキッチンで私を迎えてくれる。

「ただいま、叔父さん」

「卒業おめでとう」

「ありがとう」

「封筒が来てたから、机の上に置いておいたよ」

「うん。分かった」

私はキッチンを通り過ぎて自室に入った。机の上を見ると、封筒が置かれていた。

その封筒を持って、ベッドの上へ。そして裏面を見る。『名無し』と書かれてあった。

恐らく中身はお金と手紙だろう。

開けると、予想通り札束と手紙が入っていた。

『この間の頼んであった絵、本日届きました。約束の20万円です。お納めください。あと、この間の相談内容ですが――』

それを全て読み終えてから、私は

「……ふう」

とため息をついた。

叔父は知らない。忍は知らない。早乙女先生は知らない。

私が偽物を作り、それを売却していることを。

私は部屋の奥にあるキャンパスルームの鍵を開けて入る。そして入ってから鍵を閉めた。

その絵には、3人の倒れた人と1人の立っている男。そして仄かな黄色と黒みの混じった赤色で描かれていた。

続きを描かなきゃ。

明後日にはこの家を出るのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0210x/>

Stragglers Party

2012年1月12日23時53分発行